

軍國主義

久下豊忠

050898-000-0

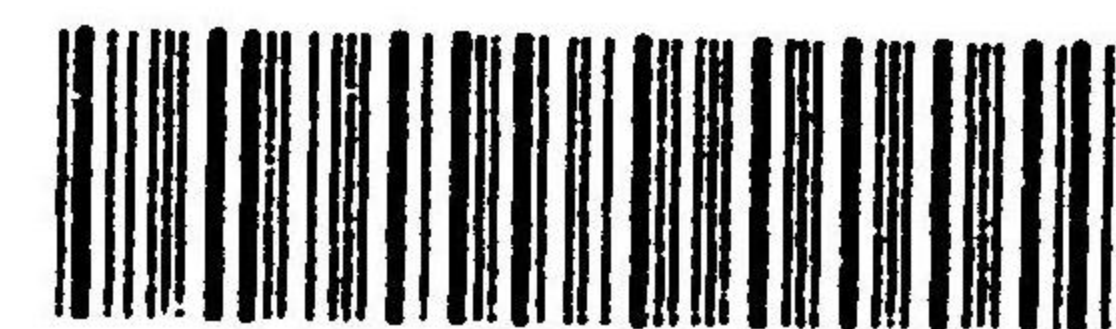
特47-326

軍国主義

久下 豊忠/著

M29

BFA-0053





163

583

久下豐忠著

軍國主義

文昌堂發兌

全

羅

針

盤

世

之

特47
326

羅經

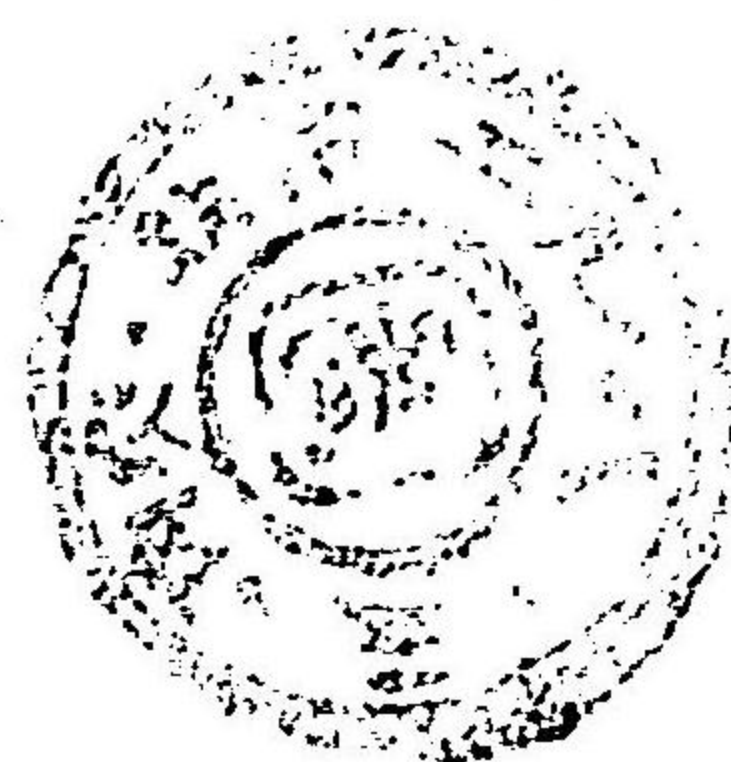
世之

久下豐忠著

軍國主義

文昌堂發兌

全



針盤

自序

條理と權力との一致を見るに至らざる限りは、國家は獨立を保持し其發達を圖るに要する唯一の策は、國民の武力を旺盛ならしめ、至誠嚴肅なる風教を振起し、雄大壯邁なる德氣を涵養する乃外又他あるを見ざる。維新以後我國民は物質の進歩に昏醉し眩惑し、殆んど其心神を攪亂せられ、形而上の事を深く之を問ふものなく。國民の武力及び風教、德性の國家生存發達は如何なる關係あるか等の問題を殆んど忘却し誤解し、ゆるゆるの觀あり。看よ我國民を國家の保護は國民の本義たる

るを忘れ、之を以て陸海軍乃責任と誤解し、甚しきに至つては、兵は無用の長物と嘲り戦を危険此事業なりと罵る乃聲を傾聽したるよあらざや。日清戦争乃打撃を幾分か此趨勢を防止するの効力ありたるよ相違なしと雖とも、是唯一時乃現象のみ。喉を過ぐれば熱さを忘る、平和十年の後、安んぞ國民を擧げて、昇平乃夢中よ熟睡せしめ亂を忘れ戦を罵るの不祥に陥らざるを知らんや、看よ第二此戦を吾人の面前よ屹立し吾人を叱咤し吾人を警告するよ拘はらざ、國民固有乃元氣、日本的品性は日を追ふて消磨し減耗し、驕奢淫逸輕佻浮薄の

弊風を滔々として其勢焰を高め、甚しきに至つて汚賤醜陋乃行を爲し世を瞞し人を陥れ己れを利する者等ハ當世此紳縉と敬重せられ、廉直節義を守り勤勉儉素なるものを時勢よ通ぜざる頑物と卑下せらる、乃奇怪なる現象を呈するよあらざや。斯くの如くにして志氣日に頹れ、道義地を拂ふて去り、衰亡せる國家が嘗て蹈襲ししる道程を追ふて走る此結果を遂よ如何ん覆滅の外將た何物をか得べき

然らば如何にして此趨勢を防遏し、此弊竇を矯正すべし乎、如何よして墮落せる風教を刷新し、頹廢せる徳氣

と涵養し得べき乎、是れ最も大切にして最も慎重を要すべき問題なり、吾人不肖敢て此問題を咀嚼し解説し得ざりと謂はざ、然れども吾人ハ此問題を解するに要する確固不拔の根柢、純白明晰なる針路を軍國主義なる者ニ存する事を確信して疑はざ敢て拙著を公する以所なり、武夫素と文ニ嫻はざ讀者幸ひに吾人微衷乃ある所を諒せよ

明治二十九年梅月中浣

著者識

軍國主義

久下豊忠著

社會進運の逆路に於て其時お應し處お隨ひ執るべきの方途は千種萬態あるべきも其行動すべき軌道に至りては終始一貫天地と異ならず變るとなし、獨り奈何せん人事の複雑なる人情の偏倚し見き社會の狀態は常に軌道の外に奔馳し大おしては天下國家小にしては一身一家を認るもの殆んど其常僻なり、唯夫れ當然の軌道あり故に其唱ふる處平易簡明知り易し、行ひ難し、唯夫れ常僻なり故に教へ難く行ひ難し、若し善事行はざれば其身を犧牲に供したりしかを想へ

人は他の自由と障突せざる範圍に於て自由なりとは如何に當然自明の理論なるぞ然れども此理論を社會に實行せんが爲には幾多の星霜を獻て幾場の慘劇を演じたるを想へ知るべし遠觀の士が唱道する處は平易なる自然の聲おして其之が反響を得んがため如何に盡瘁厲苦せざるべからざるかを

吾人は一日本人たるの天職に於ても人爲に於ても一も誇るべきなし智識に於ても一も秀る處なし獨り傲然として誇らむとする處は日本人たること是なり、獨り人類として傑出する点に於て日本人たること是なり、日本人たる吾人は陛下お忠節を盡し國家に執る所以の外他を知ることをなし然れども既お陛下お忠節を盡し國家

お執る所以の道如何を知るときは如何なる障礙の横はるゝあるも如何なる艱楚を嘗めざるべからざるも之を執行せで已まざる所は日本人たるの權利にして又榮譽と共に當然有する處の品格たるに過ぎざるの吾人が願聲叱咤軍國主義を唱ふる豈に偶然ならんや

軍國主義とは何ぞや難者の軍國主義に對して起す

べた最初の問題は先づ軍國主義とは何を意味するかおわらん是れ當然の疑問あり吾人は先づ反問を試みん陛下に忠を勵み國家の獨立を扶持し其發達を企圖するは國民の義務あるか答て曰ん無論なり更に問はん日本國民は此義務を盡すべき手段に於て一も欠る處なきか難者は多少躊躇するの後答て曰ん今や汲々として其義務を竭すの策

に従事しつゝ、あり、良し更へ一步を進めて問はん、國家獨立の存亡及其榮辱を決すべき最後の審判は國民の武力にあり、老や、然らば我國民は悉く銃を執て砲煙、雨の裡に馳騁し、彈丸雨注の間を潛りて敵陣に突貫するの覺悟あるか、良し、ありとすは之を實行し得べき實力あるか、茲に於て難者は眼を塞ぎ沈思少焉にして曰ん、足下の言は理論のみ極端の人民をして悉く武人たらしめんとはる論の如し、世豈に戰爭の事を事とすべけんやと、是れ果して理論なるか、嗚呼、是れ果して極端なる乎、此種の難者の多くして且日本人たるを悲むと共に吾人が軍國主義を唱ふるに當つて彼等が贊同者の頗る勢力を有するを慨せざるを得ざるなり、斯く言へばとて軍國主義なるものは國民軍練習を目的と

するものなりとの誤解に陥るなかれ、難者の問答は俗論の一端を捉ふる極端の反問を試みて事例に供したるのみ、軍國主義の定義は

「日本國民は國家の獨立を保持し、國家の進歩發達を企圖するの義務を有す」

と宣言するに過ぎるなり、此定義は頗る簡單明白にして又當然、自明の理、恐くは何人も之を非難するものあらざるべし、而して此の如き簡單明白なる理論を主義として事々しく唱へざるべからざるかは、乞ふ此定義は如何なる要素を包含するかを分析し、其要素は如何に現時に行はれ、如何るを一觀せざるべからず、

吾人は本論に入るに先ち豫め讀者に注意を乞はざるべか

らざるものあり、吾人は 陛下に忠義なる語を數々せざるべし、是れ至尊の御稱を數々する事の恐れ多きと共に、吾人は國家は即ち國主ありとの公法上の學說を採るものなればなり、又吾人は國家の生存及其發達を説くお、數々之を個人と對照する事を便宜の方法として採用すべし、蓋し國家なる法人は其公法人たるの点に於て個人とは趣を異おすと雖ども、第一國家の要素は個人なると、第二人權の上に於て個人と同一なりとの理由おより、之を對照するの便益あるを信せればなり

吾人の所謂軍國主義に依れば 軍國民の本分を盡くに要せざるべからざる資格は、形而上形而下に於て尙闘争時代に於る個人の如く、他を壓伏すべき武力是なり、吾

人が特にお闘争時代に於る個人と稱する所以のものは、國民が一の主權者と載た、是非は主權者に於て判斷し、其判斷は國の公力を以て強行するの時代に在ては、一個人として、他を壓伏し、意思を施行すべき武力の必要を見せ、雖ども、闘争自衛の時代に在ては、苟も個人の存在及其發達を全ふせんと欲せば、之を完ふするお足るの實力を要し、若し之を欠く時は、即ち降伏滅亡の時なるを知らざるべからば、吾人は幸おして此種の時代を歴史の當初お存在したる一事實として見るの榮を有すと共、國家と國家との關係に於ては、今日も尙は一の闘争時代たるを認識せざるべからず、國際法と稱し、萬國公法と稱するものは、國際當然の條理として、外交の通義として、至大の勢力を有すること、吾人之を知

然れども條理及通義は其條理及通義なるが故に之が解
釋を異し殊に數々其國の利益に作隨して如何様おも之
ら應用し得べきものなる以上は決して此くの如き空漠な
る理論に國家の獨立を托するに足らざるに疑する最後の
審判は國家の意思を施行する武力にあるとを知らざるべ
からせ

吾人の社會は遂に條理と權力と一致するの時代あらん萬
國平和會議お其目的を達するの時代あらん然れども現時
代必須の策としては武力を以て國家の獨立を扶持するの
外又他あるを見せ是れ列國競ふて武備を整へ其及ばざる
を恐るゝ以所なり眼中に年月なき自然の眼光よりすれば
闘争は殆んど兒戯お類するならん然れども社會發達の必

武力は神聖にして闘争は公道なり

要條件として國家の獨立を要し國家獨立の必要條件とし
て武力を要する以上の吾人は毅然として斷言せん

武力は意思を施行する事を意味す之が爲には如何なる方
策を採るべきか軍備問題おして列國の形勢に鑑み時勢
の變遷に應じる等元より一定の規矩を以て羈束すべきに
あらせ即ち戰鬥機關としては武人の養成兵器の整備攻守
の戰略等を要するも其如何なる方針を採り如何なる程度
に整備すべきかは現時國民の熱心畫策する處固より軍國
主義を貫くお要する問題にして吾人又一説なきにあらせ
ど雖ども茲に説んとする處は世の所謂軍備問題に止まら
せして更お一步を進先軍備の基本たる軍國思想お就て直

ち。論及せざるを得ず、蓋し意思の動物たる吾人々類は其有形上より發現する處のものは一に思想の結果を過ぎずして其泉源は總て之を形而上に汲ざるべからず、吾人が軍國思想を以て軍備の基となし、直ちに此思想に向て其確立を企望する所以のものも又之が爲のみ。

凡そ孰れの國民も國家觀念なりものあらじ、軍國思想なるものは國民普通の觀念たらんばあらず、況んや萬世一系の皇帝を仰ぎ武勇絶倫を以て粹とせる櫻花國に在ては、軍國思想の國民觀念を左右すること、地球上他の企及とる能はざる所、然れども國家の獨立は國民の實力にあるを定義とする軍國主義よりして我國に於る軍國思想の程度を

觀察する時は、其及ばざる所多く、達せざる所遠し、即ち吾人は軍國思想の發達を望むものなり、軍國思想は健全なる發達は軍國主義の期する處にして、軍國主義は軍國思想の最も健全なる發達を以て、軍國民の最大義務なりと宣言するものなり。

斯く論じ來れば世人は軍國主義なるもの、如何に平易簡明なるかを知得すべし、軍國思想なる者は軍國民に作ふべき觀念ありとすれば、軍國主義も亦普通觀念を基礎とし、論ずる所は單に其思想の程度如何の問題に存するを、知り得べし、然り極言すれば、程度問題なり、然れども此程度の如何は如何に國家の盛衰興亡に關する乎、其健全なる程度に至らしめんと欲すれば如何に革新すべしもの、制度如何

に創設すべきもの、方策夥多なるかを説明せば、吾人が軍國主義を唱導し以て之が實行を期せんとするの己むを得ざるを了解し得ん。

吾人は先づ軍國思想の程度が即ち軍國主義の消長が如何なるかを證明せん、蓋し眞正の主義なるものは天地の公道とも稱すべく、社會必然の現勢を捉へて命名したるに堪ざる故に人を待て始めて生るゝものあり、苟も歴史あつてより以來茲に國家の存する以上は其名こそ賦せざれば其形状こそ異れ、軍國主義なるもの、行はざることをあらざ、ペルシヤもギリキもモロイマも印度にも支那にも日本にも其興るや軍國主義の發達に與り、其亡るや軍國主義の衰頽に亡ぶ、吾人は歴史上國家の存

亡を察すれば直ち軍國主義の消長に關することを証明するは容易の業なり、願くは洋の西に於て今古を一瞥し、洋の東に於て今古を一瞥せしめよ

エジプトの文明はギリキに相續され、ギリキの文明の羅馬に吸取せられ、羅馬の盛代には其制度文物に於て決して今日の文明諸國に一步を譲らざるの盛況を呈したり、其政治上の勢力、其宗教上の權力、事物の旺盛と共に羅馬に懸り、當時人をして羅馬は世界の王國なりと嘆稱せしめたり、請ふ歴史を繕て羅馬の盛衰を一觀せん、盛代に於る羅馬が其領土の廣さ、東にユーフラチス河に至り、北にダニエーブ及ラインの兩河に迫り、西は大西洋に達し、南はアンリカの沙漠に接し、邦國一百、人口一億、渺茫たる地

中海は實に羅馬の湖水たりき、而して此大帝國の首府羅馬の文明は如何に燦然たる光輝を放ちたる乎、時の國王は傲然常に誇りて曰く「朕は死造の羅馬府を譲り受け大理石の羅馬を後世に遺せり」と、三百五十里のアピアン街道は悉く石を以て疊まれ、外廓二十里城門三十、高く雲表お幾へ、大厦麗閣軒を連ね、全都の美觀實に眼を眩せり、文學者としてはハイゼル、サラスト、リユンレシアス、カチユルラス等の諸大家、歴史家としてはリビ、プリコ、タイマスあり、詩人としてはオピッドあり、大哲學者として之基督の降誕あり、形而上形而下の進歩決して今代お一步も譲らざりた、是れオীগスタス帝(即ちオクタビス)治世の羅馬おあらせや、此の強大なる羅馬も遂にナユートン蠻民のためお滅され

ざるを得ざりき、蓋し其茲に至りたるものは要するに羅馬人心の腐敗即羅馬に於ける軍國思想の頽廢お原因したるや、明なり、オীগスタス死してより羅馬の民心は漸く腐敗し、苟且偷安優柔無氣力お陥り、華美風流淫逸を事とし、尙武の氣象日お消磨し、北方の蠻民を怖る、事猛虎のく、財貨を捧げて其歡心を買ふに至る、民心既お腐敗せり、エス強蠻は來り侵せり、ホノリアス帝の時壯麗なる羅馬府は三たび其馬蹄に蹂躪せらる、遂おオドアサーの爲めお西羅馬帝國は脆くも滅亡お終り老耄せる東羅馬帝國は蠢乎として暫く餘命を保を得たるのみ、嗚呼羅馬の發達は儉素尙武、パンと野菜を常食とせる人類の手より造り出され、其滅亡は傲奢遙逸、綺羅を飾り美味に飽きさる人類の手より捧げらる、吾

人が屬聲叱咤軍國主義を唱ふるもの豈に他あらんや
 駢つて埃土の現代を見よ、海樓府、歷山港の邊り六百萬の蒼
 生は如何なる慘境に彷徨しつゝ、あるか彼等は倭小なる陋
 屋、壁落ち骨現はれ出入尙困難なる而して最も不潔なる倭
 屋に住し、人類の營養物としては最下等なる菜汁(醬油ヲ混シニ
 モタル)及び食ふ不堪へざる草根の類を常食とし魚肉の如きは
 殆んど農民の齒牙に觸るゝとなし、而して彼等は終歲營
 々として勞作を事とし、得る處の利益は殆んど祖税として
 無慈悲なる官吏の手に奪ひ去らる、英人某曾て其困難を叙
 べて曰く「埃及農民の困難は印度人よりも甚ぶし印度人の
 苛税は収獲の二割三割甚ぶし、さか至りては五割の重税を
 納めざる可からざるものあり然れども未だ埃及人の重税

を課せられ而して半年又は一年の前納を命せられ之を納
 むる能はずして土地家屋を官沒せらるゝが如くならずと
 彼等陋屋に住し疎食に飽く能はざるもの決して故なき
 にあらず、其の斯る悲惨なる境遇に立至りたるもの、サイド、
 イスマー、王等が歐洲崇拜熱に逆上し其外交内治の方針
 を誤り爲め、虎狼貪婪飽くことを知らざる英佛人等、強
 迫せられ欺罔せられ遂に國政の干渉を招き、國家の主權は
 歐人の掌中、翻弄せられ數億の國債は償却に由なく、塗炭
 の人民は救済に途なきに至りたるものありして其責は元よ
 りサイド、イスマー、二王に歸すべきものありと雖ども又
 國民の卑屈柔情にして尙武愛國の赤城、乏しき、因らる
 んば、あらざる見よ、埃及國民は、妻子國樂を以て快樂の最上な

る者とし僅かお去て徴兵お出るを以て非常の悲歎となし
 一生村落外お出でざるもの此々皆然ると云ふにあらずや
 斯かる人類より組織せられたる社會と滅亡せざらんと欲
 するも遂お得べからせ嗚呼上古盛代に築かれざる三角塔
 は巍々として千秋に聳ゆるも、カイルの長江浩蕩として万
 古に盡きざるも、生きたる埃及は遠く逝て歸らせ慨世の偉
 人アラビをして錫蘭獄裡無念の熱涙お咽ばしむ埃及の
 末路又怒れむに堪へたり
 眼を轉じて洋の東お注げ邦域百五十五万方里、人口二億五
 千萬、国力富裕農工繁盛、是れ豈に現代の印度おあらせや、此
 大なる印度お今世紀の初めお當つてクライプ、ヘスタング
 等が率ゆる少數の英兵お蹂躪せられてより、二億餘萬の印

度人が苛政暴斂お苦められ、僅々千五百人の英國官吏と六
 万人の英國鎮戍兵の膝下に叩頭し奄々其餘喘を保つを得
 るのみ何ぞ其の甚だ悲惨なるや、其茲お至りし以所のもの
 は、蓋し、印度聯邦の民族々愛國獻身の精神お乏しく一致國
 結の氣力なく德義地を拂ひ一家相争ひ兄弟相鬪ぎ、國家は
 精神的に死したるの時、狼怨歌々たる英國をして之に乗せ
 しめたるお因るものにて、若し印度億萬の人民にして打て
 一團となり一國の全力を濺で外敵に當りまならバ百のク
 ライプありと雖ども焉んで能く其一片地だも横奪し得ん
 や、

以上は唯是れ二三の例のみ、波蘭の滅亡、安南緬甸の末路、土
 耳古朝鮮の衰頹、一として、軍國主義の頹廢お因らざるばな

く、米國の獨立、日耳曼の勃興、英國の富強、佛露の勇猛、一として軍國主義の振張、お因らざるはなし、吾人々、勵聲叱咤、軍國主義を唱ふるもの豈に偶然ならんや

更に眼を轉じて我國に於ける軍國主義の消長を一觀せよ、驕る平家の末路は如何ん、金閣寺を建て、傲奢を極めたる足利の天下は遂に如何ん、茶道生花、謠曲管絃、お太平樂を歌ひ、さる徳川の幕末は如何ん、而して彼等の興起せる時及び彼等、お取て代りし者の當時、お於ける志氣は果して如何ありしぞ、吾人の嗽々を要せず、何人と雖とも、軍國主義の消長、お直ちに彼等の興亡を支配したるを知るべし、而して吾人は古來我國に於ける軍國主義が如何なる程度に發達したるを知らざるべからず。見よ、弘安の國難、お當つて如何に大

和民族、お一致團結したるか、櫻花國民が如何お生命を捧て、戦お從事したるか、神后の三韓征伐に於る豊公の外征、お於る當時國民の意氣は如何お壯烈なりしぞ、又、淺川の敗將、楠正成は如何お仰慕せられつ、あるか、人道は義より大なるはなく、義は君臣より重き、おなしと、其兒と訓戒したる大石良雄、報仇の一擧は千載の美談として、如何に人口お増、炙されけり、あるか、命を捨て、俠骨を揮ひたる佐倉宗五郎は如何に後世の尊敬を受けつ、あるか、此くの如きものを擧げ來らば、千百にして足らず、是れ我帝國、お於ける軍國主義が世界に卓絶して、發達し、ふるを證するに足る、乞ふ更に一步を進め、何故お斯る發達を見るを得、よりし手を探究せしめよ

吾人は茲に於て第一、感謝すべきは萬世一系の皇帝陛下を至尊として仰ぐ事是なり、是は亞ぐ山水の秀麗氣候の溫和、土地の豊稔等は即ち人心の統一活潑秩序濃厚自然等の調理を得るの主因たる、勿論なり、雖も是等は殆んど先天的特有の品性にして又論究を要せ、人為の制裁として、吾人は之を社會的制度の賜、お歸せざるを得ず。正義忠勇仁愛義狭等より融和されたる**日本の品性**は之を大和魂なる名稱に依て代表され、大和魂なる名稱は武士道に依て其光明を放たれ、諸君吾人をして武士道の發達せる以所に就て一考を費さしめよ。吾人は軍國思想を以て直ちに徳義思想なりとは言はせ、然れども少くとも徳義觀念たるを疑はせ、吾人は宗教の教理

お通せ、唯だ孔孟の論ずる所佛者の説く所將また基督教の教ゆる所を聞く、或は仁義と稱し、慈悲と稱し、愛と稱し、其論じ説き教ゆる所各々異なり、雖ども要する、或は純正の理想を描き、此理想を實行せんがため、お受くる所の痛苦の忍耐を意味すること、に外なら、而して此純正なる理想の實行し難きは、人は報酬を望むの動物たればなり、即ち一時の痛苦を忍ぶには、忍んで得る所の報酬の大なることを信せしめざるべからず、即ち安心立命を以てし、天道の恐るべき、以てし、未來の賜を以てする、蓋し之が爲のみ、吾人は武士道なるもの、又之を酷似するものあるを見る、見よ身を殺して仁を爲すと云ひ、廉潔を尙ふと言ひ、富貴を淫せせと云ひ、強を挫き弱を扶くと言ひ、君の馬前に名譽の死を

遂るを以て本懐となし、信義を貫くに直ち生命を以てし、之が爲めは妻子の愛情をも家族の哀願をも意とすることなく直前、猛進断手として一步も假借する所なし、何ぞ夫れ意氣の昂然、何ぞ夫れ氣慨の壯烈なる、而して是等の壯烈なる氣慨は、勿論一方に肉躰上の痛苦を感ぜし、雖とも此痛苦は精神上の満足を得んが爲め供するの犠牲に外ならん、斯くせざるべからざる事の、其何が故に然るか、は自身すらも一定の説明を與ふる能はずと雖とも、其一方の制裁とも云ふべきは、或人をして武士道に進む時は、生きて藩に對するの面目なく、又世に立つ餘地なきが故なるなからんや、故に生耻を曝さんよりは、寧ろ潔よく割腹するを勝れりとし、或は父は其子を手打おし、君は其臣を放逐し、所謂一死常お武

士道の擔保として供せられたるのみ、又一方お於ては、替根錯節を排して武士道を全ふせん乎、君の御覺目出度、家中の評判高く、祖先の面目一身一家の榮譽之に過るものなく、随ふて主君の寵愛と一番の尊敬とは一身の爵祿と共にお高きを致すべし、無論何れの時代おも人事は齟齬し易く、高節の士お遇不遇あり、潔士は時世の制裁を以て敢て動くものにはあらずと雖とも、概して封建時代お在ては、**藩の組織**は道義的一團體たりしと言ふも、腰言にあらざり、武士道の發達豈お偶然ならんや

翻て明治時代に於る軍國主義の狀態を一觀せん
王政復古と共にお四民同等の國民主義行はれ、兵種は政權と共に武門より褫奪し、國民皆兵おして、陛下は大元帥たる

の制度となし、其方式上の制度も於て、實も軍國主義の恰も其本領を得、茲に於て軍國の弊面を完ふせりと雖も、之の伴ふべき軍國思想に至りては、頗る幼稚にして、却つて封建時代の軍國思想を習はざるべからざるに至れり、宜あり有形の組織は一朝おして之を變更するを得るも無形の精神は馴致日久しきおあらせん、之に伴ふ能はせ、茲に於て國民と軍隊と云へる關係は將に異様の觀を呈し、吾人として怪訝に堪へざらしめたり。

鎮臺設備の當代も於ては、敢て論ずるを須ひせ、十年西南の役以來所謂土民兵なるものが國家の兵力として侮るべからざる事を知らしめたる當代に於ても、敢て言はず、明治廿二三年前後に於て其關係の如何に奇怪なやしかば乞ふ吾

人をして幸お實歷したる所に就て語らしめよ。

吾人は明治二十年に始めて陸軍生徒として銃器を採たりき、而して軍事教育に於て軍人たるもの、品格と其任務の大なるを知りてより以來、如何に國民は此軍人に對する觀念を有するかを觀察するに於て忘らざりき、觀察の結果當時吾人をして退て人生れて日本帝國今代の軍人となるなかれとの嘆を發せし先、進では吾人請ふ此奇怪なる現象を打破して大に國民を提醒するの任お當らんとすの決心を生せしめたりき。

請ふ吾人をして事實を語らしめよ、風紀嚴肅なる軍隊も於ては其起居すらも、通常人にありては一大苦痛と不自由を感ぜるならん、人生の最も温き處は故園なり、人生の尤も樂

しき所は家庭の團樂なり、然れども一たび軍隊に入りては、故郷の土容易お踏むべからせ、家庭の團樂又望むべからせ、父母妻子の吉凶すらも容易お其席に臨んで苦樂を叙する能はざるなり、加ふるお營内に在ては營内勤務の時を刻する繁劇なるあり、營外に出ては練習の激烈なる共お夫れ野外演習長途の行軍の如きに至ては、風雨を問はせ、寒暑を論せせ、或時は樹蔭土窟に一睡の夢を貪り、或時は一塊の干飯一掬の濁水お飢渴を凌ぎ、其他の行動総て戦時と同一の待遇に出づ、戦時に在ては向ふ所は眞個の難敵なり、砲烟彈雨は眞個の現象なり、一舉一動は死活問題なり、而して抗敵憤慨の氣に鼓舞せらる、其痛苦を忍ぶの度は却て容易なるも平素の練習は假設の敵、假設の方略、其動作は假設の進退、履

ひ所は墳墓の地、繞る所の人は同胞、一お理想に基き、一お軍紀お従ふて進退す、其困難は戦時の比よして却めて幾陪の忍び難きものあらん、共に夫れ軍紀お違ふ所あらん乎、常人お在ては殆んど尋常免れ得ざる程の過失ならんも、壯年には有り得べき舉動ならんも、之が爲に營獄お投せられ出入を禁せられ、嚴冬の夜一睡の夢を温むるに由なく、酷熱の且濁水の喉を潤すお由なき悲境に立ち、尙ほ進んでは軍律に照され、終身の公權を剝奪さるべき嚴酷なる制裁は常に軍人の左右を圍繞しつゝ、あるなり、思ふに海軍に在ても又斯くの如くなるべし、遠洋航上怒濤甲板を洗ひ、逆浪檣頭を打つ、の危険は實お彼等の行路にして、赤道直下お炎熱と戦ひ、極北の海上に酷暑と戦ひ、釣り床夢穩かならずして、勞苦す

閑なたの場合、是れ尋常の事のみ、時お上陸勞を慰むるの餘地なりと雖も、歸艦一分の遅刻あらん乎、嚴罰は直らお彼等の頭上お落來るべし、夫を斯くの如く尋常人に在ては、一時一事すら大なる苦痛として、畏怖せざるべからざる事は、軍人の常例にして、其境遇なる事を憶ひ、而して軍人の是等の大艱難は、一に國家の獨立を保全せんが爲の眞正おして、純白なる道義的理想に基く事を想ひ、下士兵卒は之を以て一身の計をなすにあらざりて、或る意味よりすれば、一身一家の幸福を得べき貴重なる時間を捧げて、一身を犠牲にして之に従ひつゝ、ある事を想ひ、凡そ人類は苟も自己の幸福を割て他の幸福を圖りたる時は、些微の事と雖も、之を徳とし、義とし、恩として感謝すべきこと、の至精おして、又禮義

なる事を知らば、國民が軍人お竭すべき誠意、如何なるべきか、を知るべし、而して此標準は如何なる程度に實行されまか

吾人は當時の百般の事實より摘録して之を証明するの容易なるを信ぜるも、亦何人も爾く感ぜる不快なる出來事なるを以て、敢て詳密に叙せざるべし、唯だ當時二三の事實を記するお止めん
吾人は嘗て部下を率ひて練兵場の一隅に練習を試みつゝ、談遇々軍旗の事お及んる説く所ありき、時に士官某の傍らお在り、憤慨一番説て曰く、軍旗は軍人の生命なり、守護神なり、汝等將來の國民と共、又國民の生命おして守護神なり、汝等將來の國民として心得迄おして、歐洲各國お於ける軍旗お如何お貴重

三十
三十一
さる、かを説き、當時の情態を説き及ぼして、曰く、余は嘗て
某聯隊の旗手たりし事ありき、其聯隊旗は十年戦争に於て
名譽なる歴史を有するもの、其古色蒼然血斑を遺し裂痕暗
澹として、一目何人も壯烈嚴肅の狀に堪へざらしむ、時に、行
軍あり某市街へ入らんとし、軍隊は先づ常歩を採り、喇叭手
は行進の譜を奏し、軍旗は其覆を脱られて夕陽に翻り、意儀
整然隊伍肅々、鬼神も亦壯烈に泣くの狀ありき、而して國民
は堵の如く迎へり見物せり、而して彼等は如何に其感情を
現はせる、総ては沈黙なり、而して沈黙は尊敬よりも寧ろ無
感を意味せしころ甚しけれ、而して尤も赧然たらざるべか
らざりしは、當時路傍にありし外國人の舉動是なり、彼等ハ
一齊に男兒は帽を脱し、婦人は手巾を振り、小兒は手を拍て

敬意を表せり、嗚呼他國に流遇する外國人すら其軍旗ふる
の故を以て尊敬する此くの如し、而して之を生命と頼み、神
聖として仰がざるべからざる我國民おして冷淡無感覺な
る、此くの如きは豈不都合千萬ならせやと之を聴くもの皆
扼腕憤慨せざるものなかりき、而して當時余は思へらく事
跡素より不都合なり然れども國民の特性として日本國民
の意識を感ぜること決して他國に一籌を踰するものにお
らざる要するに彼等は之を知らざるなり、軍旗の何物たるや
知らざるは尙ほ可なり、其兵卒の何物たるやも真正の意義
に於て之を知らざるなり、其返塞おも震へ炎暑おも曝すれ
苦を目睹して可憐の情を發す然し是れ人の子として同情
を表せるのみ、國家の獨立を扶持すべし、最大義務を自己等

のため、に盡しつゝ、ある思人としては何事をも知らざるなり、思人として知らざる猶可なり、殆んど人の子として、之を知らざるに至りて、豈に又言ふに、忍びんや、吾人は屢々設營隊として宿營設備に従事し、宿舍の徴發も従事したる事ありき、先づ村役場へ刺を通し吏員を伴ひ民家へ入る、或は畏怖せり或は好寄心より優待をなすものなきにあらざると雖とも其兵卒なるが故に好客請ふ來れとて喜んで之を迎ふるものは甚だ寥々たりき、沈黙と温順と畏怖心等も依りて迎ふるものは猶ほ上へ位す、其間敷を偽り事故を構へ之が拒絶を試むるもの決して稀有の事あらざ、之かつた笑柄あり、其宿泊拒絶の事故として最も効果あるは家へ病者の存すると是なり、嗚々嗚々病褥を指して之を訴ふ、彼等

は最も功妙なる謀略として之を構へたらんも斯かる事お日お従事し數々遭遇する吾等に在りては、既お其眞偽は全跡の状況に於て判別するを得、呻吟の聲妙なり、鉢巻妙なり、唯歎くべからざるは藥品の不調合なると血色の尋常なると病褥の整頓せざるとお在り、即ち笑て曰く、兵隊は総ての物よりも強し、一たび此所に宿泊せば病魔も兵隊と共に家を出で去るとを請合ふ、須く安堵せよと又一笑柄あり、一陶器店坐敷頗る壯麗、我が本部へ宛てんと期す、唯見る幾多は磁器点々散在す主人狀を訴て曰く、昨仕入品到着し店頭に排置するの餘地なし已むを得、座敷に積堆を亂雜此くの如しと、善先づ全家の構造を点見し其虚構なるを見、叱して曰く、兵隊は座するお其何たるを厭はざ、磁器最も妙なりよし

兵をして其上にお坐せしめんと即ち入口にお宿舍票を粘付そ
 時を隔て、到り見るに洒掃又一物を余さず此種の出来事
 と又枚舉に遑おらば國家の何物たるを知らば國民の本義
 の何事たるを知らざるお至つては尙恕すべし尙も教育お
 る者上流にある者有志を以て自任するもの、尙且之にお對
 する徳義を知らざるお至ては痛嘆お堪へざるなり吾人は
 數々招魂祭お於て軍旗の肅然として祭壇の前にお立を見る
 經過の途次高等中學生大學々生お隊をなし若くは群をな
 ま之を傍觀するを見る、尊敬々禮を盡さば慎重の態度を爲
 さず平然仰ぎ見る事尙ほ牛店のフラフを見るに異ならず、
 蓋し彼等も又神州の男兒なり尊王愛國の赤心お至りては、
 芥手として其芳を説くもの、唯夫れ高等の學校は總ての科

學を教ゆと雖ども軍旗の由來及之にお對する尊敬お至ては
 教ゆる所おらざればなり尙得眼を轉じて當時の批評家新
 聞記者等の状態を見るに彼等の社會お何事にも批評を試
 み嘴を容る、に於てハ殆んど假を處なしと雖ども獨り沈
 黙措て問はざるもの、如きは軍隊に關はると是なり、勿論
 軍事上の事は多く秘密を要する事實之あり之を守るは大
 に良しと雖とも其秘密を守るの義務なき否な寧ろ監査に
 批評に吹聴せざるべからざる事迄も沈黙するお至つては、
 一有志者の旅行婦女の行状お喋々する彼等の舉動とし
 ては甚だ偏頗の觀なき能はば、軍艦の投錨するあれば直ち
 お訪ふて其艦内装置の整備、遠洋航海中の經歷船員の状況
 等報導し得べき範圍内に於て之を報聞批評はるは新聞紙

としては好事柄にして木鐸者としては必要の業ありや、其他閱兵式に於ける各部隊歩武の整備、着眼の正否、軍裝の優劣、是等は最も批評せるの價値あるべく、大演習に於る方略、各部隊動作の報告及批評等は又尤も有益の事にあらせや、而して吾人は一も之を見るを得ざりき、嘗て某將校の曰く、當時の新聞記者が大演習の状況を載するを見るに、其記事は宛然關ヶ原陣記を讀むが如く曰く、一方は砲烟漠々、電光一闪、曰く奮戰頗ぶる、勉む突喚雷の如しと、若し之等の數文字を用ゆるを禁せば、彼等は何事をも記する能はざるなりと、之を要するに當時に在ては其理論も於ては兎も角、事實に於ては國民の軍隊として認識せざりしなり、蓋し想ふに、軍國思想の發達せざるに、基因せずんば、あらせ、之が發

達せざるハ一は軍國組織の本領を知らざる也、一は武權は武門の掌握する所との舊慣に染み、兵權に關する事は國民の共に與ふ、竭すの本義たるを知らざる也、大平の狀態は國民が軍隊の必要ならざりしとを以ての故なりしならん、然れども此くの如きの現衆は果して國家の吉事なる乎、吾は明治二十六年の夏、嘗て政客某と會せり、某は余の軍人たりし事を知り、問て曰く、軍隊を改良するに要する最も必要なるものは何ぞやと、余は直ち答へて曰く、戦争なり而して敗るゝにありと、某は奇として答へられたりき、蓋し一代の潮流は人力の得て挽回し得べきに、あらせ、遂に時運の一大打撃を待つ、の要あればなり、幸ひなる哉、國民の眞面目を發揮し、國家の存亡を決すべき

時機は來れり、日清開戦是なり、日清戦争の事實は世人周知
れ公事實なるが故、今更之を辨明するの要なしと雖、吾人
は又軍國主義の上よりして之を觀察論究するの要を見る
なり
戦の勝敗は作戦方略の巧拙、兵員の多寡、兵器の精粗、國の制
度風物、風教等由來歴史、社會的の潛勢力に存する事、又疑
ふべくもあらざ、吾人は開戦の當初に於て、日本建國の躰裁
より、歴史上の遺傳より、現在の國民氣風の上より、敵手の狀
態に比較し、無論凱歌を以て其局と結ぶべしとは、世人と共
お豫期せし所なりと雖、此の如く勇壯に此の如く快
活に戦争の好經過を爲すべしとは豫想の外に出たりき、世
人は之お依て幾種の事實を知りたる、又如何お爲すべき

かに就て習ふたり、即ち東洋の形勢は如何お必迫せる乎、我
國の如何お覺悟せざるべからざる乎、兵卒は國家の獨立を
保持するお如何お必要なる乎、彼等の辛酸は如何に國民の
彼等に對しべき情義は如何に就て習ふ所多かりき、見よ戦
捷の報を得る毎、如何に感謝したりし乎を、軍裝の人を見
る毎に如何お敬愛したりし乎を、其の送迎と云ひ、恤兵と云
ひ、救護と云ひ、國民は滿腹の同情を以て、彼等お接したりき、
然れども、吾人軍國主義を抱持する圓滿なる發達を企圖す
るもの、眼より之を見れば、其同情は未だ感情の上に漂ひ、
深く理義の上お甚かきと云ふに、客ならざるを得、其感謝
は口頭に溢る、お深く骨髓お徹するものと認るを得、蓋
し其然る以所のもの、は東洋の形勢に暗きと、敗亡國の慘狀

を回顧せざるも其戦勝の如何にして得られたるかの事實に付き未だ深く國民一般の腦底に刻したるものあらざればなり乞ふ少しく説く所あらしめよ

東洋の形勢

は既に紛亂に瀕せる事を豫言するの時代は過去となりし、今は實行の時代となり、我島帝國の如何なる天賦を有し運命を有するは今更之を喋々せず露國は今や其圖南の一大要素として計畫せる西比利亞鐵道は年を経せして竣工を見、其首府聖彼得堡とは直線貫通宛然として歐亞を横斷し、今や不凍の水を嘗めんと欲して頭首を擡ぐるの大蛇に似たり、之と先天的仇敵たる英國の、其印度の防禦の爲め、其東洋に於る商業上の利益を保全せんを爲轉然大悟大あ東洋に艦隊を増加し不時の急を備ふる

に汲々なり、佛國は東洋領地の權力を握んが爲め、歐洲政策の便宜を得んが爲め、獨乙は新羽翼を張らんがため、今や歐洲列國の權勢は大平東岸に集中し、一導火線のお点するど共お爆然一聲正に東亞の天地をして暗騰たる空中お飛揚せしめんとす、蓋し歐洲各國は其位地形勢の上より、人口過多の点等より、基因し、虎視眈々其罅隙を窺ひ互ひお併呑の慾を恣にせんと欲するの故、お列國相互の關係頗る機敏にして、其競争軌轢絶ゆる時なく、殊に其政府人民が數百年間養成し來りたる思想は割裂呑噬争鬪壓伏の思想なるが故に、如何お平和を飾り親愛を唱ふも、虎狼の心情は到底虎狼の心情おして仔細お其舉動を觀察すれば、實に震慄すへきものあり、彼等が近年其爪牙を研き其羽翼を張て東洋を

攫取割奪せんとするもの毫も怪むに足らざるなり而して
將來東洋政策の拠点たり導火線たるものは蓋し鷄林半島
ならん此の朝鮮半島の主たる地位お立て文明の扶植獨立
の保持お任ずるの天職を有するは我島帝國なり我島帝國
が東洋政策の上お如何に重大の位置に如何お彼等の抱負
と撞突し易き位置にあるかは何人も判知し得る所なり而
して此重大の位置に立て國權を張り獨り之を保ち歐亞の
平和を維持するものは特に武力お存することを知らば吾
人が直接間接に之が充分の準備を全ふするお非れバ須臾
も枕を高ふして安眠する能はざるにあらせや吾人當代の
不幸は、吾人當代に忍ぶべしとするも我帝國は建國の
久しき忠勇武烈ある祖父が心膽を鍊り熱血を濺ぎ其金鑿

無缺の國體を擁護し獨立を保持したる帝國なるを憶は、
又吾人幾代の子孫が嬭々として秀勝なる山河お眠り揚々
として武勇國民たるの榮光を飾すべき島帝國なるを想へ
ば吾人は義として須臾も安坐する能はざるなり
乞ふ更お戰勝國の榮光を謝せんご欲せば先づ敗亡國の狀
態を知れ凡そ人の痛苦とし不幸とし耻辱とする所は吾人
の權利なるもの一たび欠くる事是なり而して敗亡國は
既お其主權者たる國家自身が其國家たるの本領を失ふ況
や之が國民たるもの權利おして焉か存在するを得
ん吾人は實在として蓋し戰時公法お於ては假ひ國民と雖
も非戰員たるもの權利は之を貴重せざるおあらず然れ
ども是多くは書冊上の空論のみ敵國民の權利は多くは敵

手の軍隊の権利及便宜と障突する所に於ては一も之を認めらるゝ事なし、古代の敗亡國の慘狀は敢て言はせ、近世に於る獨佛戦争すら、其巴黎陷落に於て、佛國民の受けし苦辱は如何ぞや、現に吾人は之を目睹して、反照の感お堪へざりき、見よ日清戦争に於て我軍は、最も文明的動作を以て軍紀とす、其行ひ得べしに限り、於ては軍法上の原則を忘却せざりき、然れども、尙ほ戦争の目的及軍の便宜と障突するに於ては之を省みるの暇あらざるなり、戦争中は無論の事既に平和と局を結び守備に駐在する時すらも又彼等の権利を認むる能はざると之ありき、余は嘗て職を兵站勤務に執りしと記、一兵站線路の盜水の爲閉鎖したるとき大輸送の任務は我兵站部に於て當らざるを得ざる場合となり、忽ち守

備兵の増加、糧食縦列の新設となり、左なきだに、僻陬の孤屯従來の駐屯さへ充分ならざりしに俄か増員擴張するの已むを得ざる場合に際會し、守備隊及び糧食部の宿舍、糧秣の倉庫、旅人の宿舍等急速に設備せざるべからず、茲に於て先づ近傍の民家を點檢し、其用お供し得べき者は、官をして旨を教し、立退を命せしむ、彼等躊躇して應せず、然れども、刻下の必要に、躊躇を許さず、憲兵若くは軍夫をして其家財を運搬せしめ、尙ほ聽かざるものあれば之を捕へて門外に驅逐す、所謂儒生(讀書人)なるものあり、蓋し稍理義を通じ、訴て曰く、日本兵の仁義に富むと今徴す、小民の家を以ては、老者幼者眠るに處なし、乞ふ愛憐を垂れよと、余は即ち曰く、然り、日本兵は仁義に富む、余も又一の日本人にして

人の子なり、父母あり、兄弟あり、一族あり、共々刻下に其住居を失はざるべからざるに際會せば如何に困難なるべきを思へば、汝等の境遇轉た愛憐の情に堪へせ、然れども汝の住宅を要する以所は云々の要あればなり、宿舎なければ我軍人は露天に起臥し、米麥腐敗せば日本の人馬は飢餓お籠れ、又軍の用をなす能はせ、苟も軍隊の用を爲すに欠くべからざらんか、汝等の生命をたも奪ふ事、梨花を折るよりも易しと答へたりき、見よ吾人日本兵は理義を辨するに於て決して苟もせざるもの、然れども彼等が住居の自由も財産の權利も家庭の團樂も之を認むるに能はざるなり、共に夫れ處を轉じて万一にも彼等の戦勝を得、馬關を以て大連灣とし、大坂を以て海城とし、東京を以て北京とし、彼等は琵琶の

附近に其戦陣を進めたりとせよ、公法の何物たるを知らざる彼等、軍紀振はせ、言語通せざる彼等、お在ては、財を掠め家を焼き人を戮し、婦女を耻かしひる等、少しの假借もなさず、るべし、斯くの如くにして受くる吾の苦辱は果して如何あるべきぞ、勝敗は戦争の常なりとせば、是等の事は決して有り得べからざる事實なると假想する能はざるなり、此痛苦を憶ひ、此耻辱を察せば、吾人が平素兵を養ひ、戦艦を造り、武を練り、勇を鼓舞するとの如何に必要なるか、而して之に要する出費と勞苦は如何に輕易なるかを知らざるを得ん、勝敗は兵家の常なりと云ふ、吾人國民は何等の多幸ぞ、敗亡の苦辱を嘗めるとなくして却て土地を得、償金を得、榮光を世界に發揚して、今や其土地を如何に改良經營し、其償金

を如何に運用處分すべきかお就て世人尙ほ曉々たり、此光榮は烈宗の御威徳と大元師陛下の稜威とに歸すると勿論おして、又國民の敵愾雄武の氣尙お基く事勿論なりと雖ども、直ちに其局に當りし軍隊の苦戰奮闘與て大に力あるとは何人も認むる所ならん、乞ふ吾人をして此榮光は如何なる苦楚に因て買はれたるかを追想せしめよ、軍人の戰陣に於ける苦楚艱難は到底筆紙の能く形容し得べき限りにあらずと雖ども、其一斑を擧れば、吾人は敵に有形無形の二種あり、困難おも、又有有形無形の二種あることを知らざるべからず、清國兵は紀陣振はる軍略整はる好敵手として相對するの價値なしと雖ども、彼等も亦其海軍に於ては無論陸軍お於ても歐洲の軍人を聘して教師となし、近時

の戰術をも用ひ、近時の武器をも用ゆる所の有力なる敵手とまては侮るべしものあらず、況んや彼は其墳墓の地を履み、同一の國民を使役し、我は懸軍万里の異域お在て之と對峙するものなれば、其一城を陥れ一壘を抜くや結果は一片の號外となりて、本國に飛來し、國民は歡喜雀躍を擧げ、戰勝を祝す、雖ども焉んぞ知らん、其局に當るもの、苦戰奮闘は如何に猛烈に如何お慘憺なるを、一たび敵手に陥れば、身首處を異にし、耳を裂け、目を抉り、兩支を斷つが如き慘狀あり、爆然一片の砲彈は肉を切々にし、骨を粉にし、六尺の軀幹の僅お血痕を留めて飛散するあり、戰の酣なるや、負傷せる戰友を鞭ち死屍を履で突き込ざるべからず、救ひ得らるべし、傷兵も敵手に罹りて慘刻なる最期を遂げざるを得

ざる等の事往々おして然り、如此修羅場は一戦争に必らず
 經ざるべからざる**軍旅の驛亭**なりとせば、百戰百勝、遼
 東半島を席卷したる我軍の狀況は果して如何ぞや、豈に唯
 だ此くの如死に止まらんや、戦争は最も恐るべき無形の
 敵あり、即ち天候風浪、惡疫等之なり、炎熱焼くが如く、端坐扇
 子を擁して尙ほ且つ堪へざる酷熱の時に於て、山砲を絶崖
 の高さお運び、五寒朔風骨に徹するの嚴冬お於て、終夜雪中
 お立て、戰鬥哨兵となるが如死、或時は洞窟の裡に野狐と同
 居し、或時は激浪怒濤お漂ふて、遠洋に苦む等、其困難一とし
 て達せざるものなし、殊に無形の敵として、最も有力なるは
 惡疫なり

吾人國民は軍事衛生の整頓に至つては、軍事衛生員及赤十

字社員お向て感謝すると共に、世界お誇るべき權利と満足
 とを有するものなり、然るども如何に整備するも、其軍事衛
 生たるの性質を知らざるべからず、百事整備し便宜備はら
 ざるなき内地に在てすら、惡疫の流行お際せば、非常の慘劇
 を演せる事、世人の目睹する處なり、況んや衛生材料お限り
 あり、衛生員に限りあり、殊に衛生に要する百般の便宜を欠
 く、の地に在て、隨時軍と共に移動して、衛生事務を執行し、其
 患者の如きも、銃創に疾病に一時お數百人を収容せざるべ
 からざる次第なれば、完全お圓滿に衛生的療養を得んこと
 は、固より期すべからざるの事なり、苦戦後の野戰病院の如
 死と先づ一時救急の手當を得るを以て、最良満足となさざ
 るべからず、若し夫れ、惡疫の侵す所となるや、更に其慘狀の

酷なるを見る
 何人も知る如く支那人は不潔と云ふと於ては最も感ぜざる人民なり而してパチルスは彼の最も親密なる友なり加ふる軍人の宿舍及び營養物の如きは其規則としては衛生法に基て修養設備せらるゝと雖とも規則は一の標準たるに過すして、宿舍は僅か雨露を凌ぐに足り、飲食は纔かお飢餓を凌ぐを以て満足せざるべからざる事是なり、浴せざる事幾旬皮膏苦を生じ、弊衣虱子の跋扈を見る、風雨お混じては光線お晒し、李地に一匪を貪て、張家お渴を癒す、如此もの連日如何に強健の人と雖ども生理的動物としてはその機關お欠損を來さざるべからざるは數の理なり、一たび惡疫の襲ふ所となるや之を、防んお遑なく、病勢は恣に猖獗

を極め小假設病院一日おして七十人を斃せしとは現お余の目睹せし處なり(明治廿八年四月下旬第二期作戰計畫のため近衛第四師團の清國大連灣お集合したるとき柳樹屯お於たる慘狀)病勢猖獗なれば看護人隨ふて欠員を生じ、慘狀は随ふて激なり、吾人は**幾多の死屍**が牛車に堆積せられ、支那人の無感覺なる烟りを吹死つゝ、火葬場お送らるゝを見たりき、死に瀕するや獨言て曰妻は離敗して後夫を迎へ子は姉に托せよ而して教育せしめよ、某の牛一頭は之を請取らざるべからせど一の聽者なき遺言を殘して逝くもあり、自己の寢具たる一枚の毛布を抱て名殘りを惜むあり、其故國の祭禮を夢みつゝ、ふし憐れお歌ふあり、凱旋の戦友に泄れて異域の鬼となりたる彼等の慘狀は現る余の實

見せし處にして憶ひ起せば今尙ほ震慄を覺ゆ、尙ほ此くの如きものを學ば來らば一として痛切悲歎歎流涕の種ならざるはなし、**嗚呼**若し國難の横はるなくんば、彼等は温き家庭の主人として、良人ど志て町村の若者として、善良平安なる國民として、春は青々たる田畝を耕し、牛馬の鋤を止めて、菜花の間に徘徊し、鳥聲水流を耳おしては、妻と其行廚を開きしならん、秋は豊穰なる黄金の稻を刈りて、寺院の鐘聲に歩を運びつゝ、足は温き爐邊に向ふて進まざるらん、而して彼等は國民の歡聲を耳おする事なく、父母妻子の温容お接することなく、滋焉異域の蠻土に骨を埋め、殺風景なる高陵原頭には、聞馴れざる鳥聲、異様なる草木を友として、不歸の客となれり、**不歸の客**とならざるおもせよ、豫備

後備軍人の如きは、各事業のたゞお一家の礎としては有益の時代、之を抛て公事お就く勿論、家族救護の方法あり、義侠者の補助ありと雖も、粒々之に依て朝夕を辨せしもの、如きは其眞義は、兎に角外形の怡も乞食の倚頼するが如き状況お因て一戸を守りしもの、少なからき、彼等の苦痛果して如何ぞや、幸ひお凱旋の榮を得、國家の恩賞お據り國民の歡呼を聞き、職を服し家を建つるもの、如死は又以て少しく慰するお足ると雖も、愛兒、良人、遂に歸らず、歌人をして、**みなし子の軍歌**うたふて、臘月、と、**味せしむるに至つては**吾人、**想像だ**おも堪ゆる能はざるなり、
東洋の形勢は如此、夫れ急に、之に處する國民の本分は如此

夫れ重大お、敗亡國の悲惨苦辱は如此夫れ劇刻お、戦捷の光榮は如此夫れ經營慘憺たる血涙より絞り成るを憶へば吾人は情として義として更に今代の軍國思想を喚發し、作興し、地下の大忠民お酬ひ以て遠く將來の大計に供するの義務あるを信じて已まざるなり。

吾人は軍國主義を擴張し、軍國思想を養成する事の國家の急務にして、又國民の理義と感情お於て其本分なるを見たりき、吾人は此くの如く軍國思想は國の武力の点お於て必要なるを見るど共に更お一國の風教の上に至大の關係を有する事を知らざるべからせ、風教は固と形而上の觀念に基礎を汲ひ、形而上の事は宗教、教育の主る所なり、然るをも吾人が見る所によれば、宗教なるものは宇宙の眞理、人世

必然の大道を説くものおして、教育なるものは科學若くは事實の上より又人世當然の本務を説くもの、其風教を改新するに於て最も有力なるものなりと雖とも、即ち宇宙の眞理なるが故お之を英に説くべく、米お説くべく、共和國おも專制國おも説き得べき汎博なるものならざるべうらず、既お人世當然の本分なり之を総ての人類の上の一の徳義とし、本分として説くべきものならざるべからせ、然れども甚だ高尚おして且つ汎博なる宗教上の理論は如何お之を現實の時代お應用し得べきかは、其科學上人生當然の本分は現時に現實お如何お活用すべきかは、共に最も困難お最も注意を要する事實なり、古來文明の進歩、國運の發達に就て見るに此應用の妙を得ると否とに關する事多きを見る、

見よ佛教の眞理は最も幽遠も最も高尚に、印度は之が起天
 地として世界の當初に開化の状態を現せりと雖ども、終に
 彼の耶蘇教の歐洲文明を發達せしめたるに比して、天淵
 ならざる所以は種々の原因あるべしと雖ども、一は隱遁厭
 世の主義に仰ぎて現實に重んずるを置かず、之を反して耶蘇教
 は現實樂天主義を採り之を社會事物に應用するの妙を得
 たるが故にあらすや、宗教として其品位の高低孰れも存す
 るかは、別問題とし教化の實踐に付ては之を耶蘇教の巧妙
 無比して其優劣を判するは敢て難事も非ざるなり、又彼の
 儒教に付て見よ、仁義と稱し忠孝と稱し之を唱出し之を祖
 述せしものは支那もあらずや、方今に於ては孔孟を以て天
 神と爲す、山村孤島の末に至るまで口を仁義を説き忠孝を

稱せざるものなしと雖ども、彼等は之を一の哲學とし大文
 學として崇拜するのみならず、社會現實の行爲の上も活用
 するとを知らざるが故も不仁不義不忠不孝、其風教の振は
 ざる事實に甚し、之に反し我國が孔孟の學を輸入せしは中
 古なるありと雖ども、此理論を採ては假借する所なく、精
 神的に現實的の之と社會の實事に應用し、咀嚼し國風を馴
 致するに於て大も得る處あり、蓋し佛教の精神と云ひ
 佛陀の教理と言ひ國風と共其精華は之を武士道に發し
 敢て理想とせず之を實行し、敢て未來の苦樂とせず現實
 之の賞罰を制裁せり、茲に於てか我邦の風教は武士道に由
 て光明の基礎を爲し、光明は四民に反映して茲に日本人た
 る特有の氣風を存せしなり、然るも封建の腐敗と共に光明

の中心たる武士の制は廢せられ四民平等となり自由となり富の競争となり新宗教の輸入となり新科學新風俗の輸入となり茲[○]於[○]て風教の據るべき處[○]を失ひ[○]識者をして文明は果して幸福なるかを疑はしめ[○]進歩手退歩手を疑はし[○]越るに至れり茲[○]に於てか宗教家は其の教會制度を以て矯風の具お當んとし教育家は其國家觀念を以て德育の基本を得んと求め政治家は僅儉尙武を説き學者は國粹保存を説き之が救運の策に窮したるにも拘はらず[○]輕薄風をなし[○]華奢是れ競ひ信用地を拂ひ有形上の長足の進歩をなしたるに反し形而上の日本は晦冥濛々殆んど暗夜の如き觀を呈せり吾人は想ふ宗教々育の布及政体風俗の革新固より其急を見ざるな[○]死[○]あ[○]ら[○]せ[○]又軍國思想を以て直ちに風

教を維持作興するに足ると云ふにあらせと雖ども軍國民として眞正の資格は眞個お道義觀念お基せざるを得せ[○]左らば軍國思想の發達は如何に風教の上に大なる關係を持つかは推して知るを得ん[○]完全なる軍國思想お在て[○]男子を以て悉く兵と認め[○]婦人を以て軍人の妻女として認め[○]さるべからず[○]而して陛下の軍人訓誡として下し賜はり[○]五ヶ條の勅語は吾人は日本軍人と[○]まて[○]之を遵奉するの義務ある[○]と共お日本國民として[○]人類として[○]之を服膺せざるべからざる[○]を見るなり[○]勅語の要を擧んに[○]其[○]御[○]趣[○]意[○]は[○]要[○]する[○]に[○]一[○]忠[○]節[○]を[○]盡[○]し[○]禮[○]儀[○]を[○]正[○]ふ[○]し[○]信[○]義[○]を[○]重[○]ん[○]じ[○]武[○]勇[○]を[○]尙[○]び[○]質素[○]を[○]旨[○]と[○]す[○]べ[○]し

の五ヶ條にして此五ヶ條は誠心誠意を以て實行せよとの御趣意外ならず又軍人の憲法とも稱すべき讀法に至ては

第一條 誠心を本とし忠節を盡し不信不忠の所爲あるべからせ

第二條 長上に敬禮を盡し等輩を信義を致し粗暴倨傲の所爲あるべからせ

第三條 長上の命令は其事の如何を問はず直ちに之に服従し抗抵干犯の所爲あるべからせ

第四條 胆勇を尙とび軍務を勉勵し恐怯柔懦の所爲あるべからせ

第五條 血氣の小勇を誇り争鬪を呼み他人を侮慢し世

人の厭忌を來す等の所爲あるべからせ

第六條 道德を修め質素を主とし浮華文弱等に流るゝの所爲あるべからせ

第七條 名譽を尙とび廉耻を重んじ賤劣貪汚の所爲あるべからせ

どの七箇條にして此七ヶ條中第三條は普通國民に於て多少其實行に踴躍するものあるも他の箇條は其一ヶ條すらも**道義の標本**として最良至善なるものあらせや

是れ吾人國民は宗教の教理と道德の原理とを於て服従せざるべからざると共又家庭及學校の教育其他社會の風儀制度は一に此軍人的思想を以て精神の基礎となし毀譽の標準とし實踐道德として存する大義なることを知るなり

吾人が軍國思想を以て風教問題に關すと云ふ豈に偶然ならんや
 請ふ更に吾人をして國富増殖の点に於て軍國主義を應用せると否とあ就て利害の存する處を一言せしめよ
 維新後新科學の輸入と共に輕薄華奢の弊風我櫻花國に吹き渡りてより富の競争日を逐ふて激甚となり拜金の勢力非常にお高まり來り人皆廉耻節義を忘れ唯眼前の浮利虚榮を貪ふんとするに至れり然れども大なる富榮なるものは決して斯る賤劣なる思想より湧き出る者にあらず廉耻節義は總ての標準となり總ての原動力となる吾人の説く所の軍國思想は商業にわれ工業にわれ總てを支配し總ての原動力となりて本來の面目を發揮すべし昔しの武士は利

益を疎外し殖利富榮の道を以て賤劣とせり此れ武士道の本色にあらざして其餘弊なり彼の廉潔義侠にして然諾を重んずる是れ軍國思想の面目にあらずや信義を重んじ禮儀を正し質素を主とす是れ軍國思想の本色にあらざや彼の平身低頭を以て興業獲利の秘訣となし其面を唾せらるるも利益を得れば足れりとなすお如き者或ひと僥倖にして鋼鉄の小利を博すると得べしと雖ども決して大なる富榮を積む能くさるなり試に海外貿易に就て過去の歴史を一瞥せよ勿論我帝國の海外貿易の年々増加するは慶すべきの事實にして其前途に大多望を有するは何人も首肯する處然れとも過去の経歴は未だ以て吾人を満足せしむる能はず否満足せしめざるのみならず常にお吾人をして憤

概措く能はさらしめさるもの多かりき見よ從來我商品實
 接の輸出者とて其大利を壟斷し貿易の主權を握り來り
 しものは殆んど外人にあらざりや輸入に於ても又然り其茲
 お至りしもの素より資本の乏しきと貿易お手慣れざる
 世界の趨勢に通せざる等の原因によるべしと雖ども要す
 るお我商賈が進取の氣力なく加ゆるお廉耻節義信用等營
 利的要素たる総てを顧えず唯一時の虚利を博するに勉め
 永久の大計を想はざるお因らばあらざり夫れ斯くの如
 く彼等の多くは商賈貿易家たる眞用の資格を有せざ既に
 資格を有せざるが故に信用なく信正なきが故お利益を得
 せ徒らに貿易の主權を外人に掌握せられ叩頭其膝下お媚
 び空しく其精粕を嘗むるを以て甘んぜるの甚しきものあ

り斯くの如くにして年々歳々数字的貿易の進歩を見るも
 其實際に至つては大お慶賀すべからざるものあり軍國主
 義の擴張せざるべからざり軍國思想の發達せしめざる可か
 らざるの理由又茲に存せ
 説去り説來り吾人は軍國主義の何物なる軍國思想の何物
 なるや及び之を擴張し之を發達するの必要と理義と人情
 お於て吾人の本分たるを説明せり果して然らば第二お
 起るべき問題は如何おして實行すべきかおあり吾人が苦
 心經營と實お此に存す如何に其主義の善良なるも之を實
 行せざれば空中の樓閣の如く如何に其手段の巧妙なるも之
 を現實ならしめざれば水上の泡沫の如く之を實行し之を現
 實ならしめんか吾人は地方の實況當時の世態とお鑑み

徐ろ、お畫策する所あり、更お軍國策一篇を著述して大方の教を乞ふべしと雖とも吾人が**畫策の標準**とする處は大要次節お述る所の如し

- 決闘條例を廢するの可否
- 徴兵脱籤者に相當課税し應徵者の救護お充る事
- 兵器發明者の保護獎勵
- 聯隊管區及軍艦を地方自治管區と密接せしむべし
- 國民の德行表彰勳章を制せよ
- 國民の武勇表彰勳章を制せよ
- △ 軍事的日曜學校を設くべし
- △ 學校躰育は更お激烈なるべし
- △ 地方躰育會には軍人を參列せしむべし

△ 學校生徒は如何なる風雨にせよ乗車登校の如きは嚴禁すべし

- △ 中小學軍事的教育の監督者を設くべし
- △ 校長をして子弟生涯の責任を負はしむべし
- △ 兒童をして將校及金鷄勳章お敬禮せしむべし
- 軍人の精神教育を一層盛にすべし
- 軍人營内の賞罰は公告すべし
- 營外に於て軍人の舉勦は申告を採用すべし
- 將校は官舎お寄宿すべし
- 將校生徒の採用法を擴張すべし
- 軍人の所刑おは切腹を命せよ
- 各聯隊に下士學校を設け下士の品位を高めよ

- 軍人の人物表彰の勳章を制せよ
- 軍隊競技會おは地方公民を參列せしめよ
- 預後備軍人及聯隊區員は軍隊と國民の紹介者たるべし

軍國策概要

小事業すら其成效は團結の力に因らざるべからんや
 事一國の武力に關し一國の風教に關し滔々たる世人をし
 て其歸向する所を知らしめんとする如き國家的事業お到
 つては無論國民團結の協力お依らねば何事をか爲し得
 ん吾人は公共的事業國家的事業の團結を見る甚だ稀なら
 せ然れども其組織及歴史を見るに多くは是れ砂上建築的
 にして未だ吾人を満足せしむるものあるを見せ彼等は先
 づ人爲高望の士を會頭お頂き、在朝野の名士を賛助員とし
 都門お一大標札を掲げて機關雜誌を發行し其名を壯おし
 其聲を高くし漸くおして社會お名を知らる、お及んで世
 態の變遷又は些少れ事故の爲め萎微不振終お其題を消し

其名を亡すもの往々にして然り、吾人の如此輕易なる方法に依て軍國主義を發揚せんとする程に淡泊なるものにあらず、吾人は思ふ永久にして確實なる事業は先づ其基礎を永久にして且確實なる組織の上に求めざるべからず、又想ふ普及の事業は宜しく普通の範圍を撒布せざるべからざるを、吾人の主張する軍國主義の如きは國家の生存と共に永久ならざるべからず、國家の擔保と共に確實ならざるべからず、國民の協力と要するが故に汎博ならざるべからず、茲に於てか吾人は**行政自治區**を待ち、先づ其基礎たる各町村に於て市に於て之が團結を求め、郡も及びし府縣に及びし、遂に打して全國の團結をすることを望まざるを得ず、吾人は其永久にして確實に普及の三者を望んる之が基礎

を町村も求むると共、又將來風教の教師、毀譽の審判官は、又之を其團躰も求むるとの切要なるを見るなり、此團躰が如何にして組織され、保持せられ、又如何なる職務と權利を有するかの甚だ大切なる問題にして、熟考を要すへきも、吾人は各市町村も此團躰の分會を設けて、其會則會員の權利義務等は一切分會の決議に任し、分會は或る制限を以て幹事及事務員等を選定し、又常議員等の制を設け、府縣の支部も屬し、斯の如く、おして團躰の事務を學く而して、府縣の支部は直ちに團躰主部の直轄も屬せしむるか、如くせば、茲に於て全國統一の團躰組織を見るを得んか

體育の事

躰軀の壯健ならんとは個人として必要の業なり、職務上躰

力を練るものに至つては必要なしと雖ども、又之を軍國の上より觀察するときは、單に壯健なるを以て満足すること能はず、又或る一種の技藝に耐得するを要す、兵としての技藝は其兵種に應じ各種の動作を要するも如此なる業は普通國民の習ひ得べきとにわらず、吾人は億ふ其最も必要にして最も壯快に、最も壯快にして最も簡易にして最も行ひ易きは、乘馬、射撃、擊劍、遊泳、角力、端艇等ならんか、之か實行方法としては乘馬の練習の如きは便宜の各町村に馬場及乘馬數頭の備用をなし平時練習せしむへく、毎年數回郡部競馬場を其技を競としめ、射撃は郡部に適宜の射場を設て之に數挺の村田銃及彈藥を備へ附け平素練習を便し且の毎年數回競点會を開く、角力の如きは各町村に設る可な

り、遊泳端艇の如きは其水邊の形狀に應じ便宜共同使用場を設け又競争をなすべし、之を獎勵方法としてと第一、名譽の表彰、第二、金品を付し、之が待遇を厚ふすべし、金品賞與は寧ろ多きに過ぐるを可とす

德育の事

軍國民は勇壯眞率なるを共に、又最も道德の基本たる信義、忠愛等の思想に富まざるべからざるが獎勵方法としては、其町村に於て無形の制裁を與ふるのとならざる適宜風教上の規約を設け、之に違反するものは公然交際を謝絶すべし、又他地方へ移住するものには其素行證書を附與する等の制を設くべし、又忠愛仁義苦節等人の龜鑑となるべきものは、徳義の表彰を制し金力又は勞力を以て之を扶持すべし、

而して総ての賞罰は郡會の決議を審案し本部若くは支部の會頭之を裁斷すべし

明治廿九年七月十八日印刷
明治廿九年七月廿三日發行

〔定價金拾五錢〕

和歌山縣和歌山市堀町二十番他

著作兼發行者

久下 豊 忠

印刷者

同東長町十一丁目三番地

渡邊 恭 太郎

印刷所

同十一番丁七番地

耕 文 舍

發賣者

同新通三丁目七番地

三宅 小 次 郎

各地大賣捌書店

和歌山
全全全全全全全全全全大全全全全全全全全
京坂

平井文助
津田源兵衛
松本國助
高市伊兵衛
宮井支店
小野元吉
野田文六
田中太右衛門
岡編眞七
前川善兵衛
吉岡平助
松村九兵衛
積善松館
中村芳松
北村庄助
岡本文助
博本文館
富山房書店
普山房書店
文學社

京都
全全
神戶
全
名古屋
德島
田邊
新宮
御坊
湯淺
日方
粉川
全川
名手
全寺
妙山
九度山
箕島
其他各地書肆

福井源次郎
中村源吉
船井弘文堂
熊谷久榮堂
川瀬代助
坂井萬吉
松崎茂平
集文社
津村新藏
岩崎種之助
田島丹三郎
伊藤喜三郎
森川喜三郎
平井清三郎
堀富三郎
齊藤幸助
今川嘉兵衛
由良藤吉

